パーリ語初期仏教経典における
二種涅槃界への展開

大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員
富　田　真理子

はじめに[1]

涅槃（nibbāna; Skt.: nirvāṇa）には二種あり、渇愛等の煩悩を滅した生前の境地と解脱者の命終および命終後の境涯、つまり、生前か命終［後］かの 2 つの異なる時点があるとされる[2]。これらはパーリ語註釈文献において、有余依涅槃［界］、無余依涅槃［界］と呼ばれ、二種涅槃［界］の教理として確立している[3]。

パーリ語初期仏教経典中[4]、二種涅槃界は、It pp.38−39［第 44 経］でしか説かれていないことから、初期仏教の終盤に成立したとされる[5]。しかし、これらの成句がまだ使われていない経典に関しても、註釈やおおむね註釈の理解に準ずる先行研究においては、二種涅槃［界］の教理に照らして、生前か命終か、涅槃の時点を区別して解釈する。

筆者は『スッタニパータ』（Sn）を中心としたパーリ語初期仏教経典中の涅槃の語彙[6] を抽出し、涅槃の時点に注目して考察を行い、その結果、明確に生前、あるいは、明確に命終［後］を示す用例以外に、註釈とは異なり、文脈が生前であっても、涅槃の時点は生前・命終のいずれとも判別がつけられない、言い替えると、いずれの時点とも理解可能で、ひいては時点を問題にしていないともとれる用例が相当数あることを指摘した[7]。また、最古層[8] とされる韻文経典では命終のみを示す例はなく、Sn 中、明確に命終を表す用例は、冒頭に散文があり偈文が続く Sn Ch. 2 第 12 経「ヴァンギーサ経」1 経に複数例[9] あ

るのみであることが明らかとなった。

先行研究の成果によって、涅槃観の変遷に関しては、ほぼ解明済みであるともいえるが[10]、さらに網羅的に掘り下げて考察することにより、本稿において、これまでに示されていない知見を提供したい。

1. 二種涅槃界の考察

1.1. It 第 44 経（韻文と散文を含む経典）の内容

本稿においては、まず二種涅槃界を説く It pp. 38–39［第 44 経］[11] を取り上げる。本経は、散文と韻文からなる短い経であり、涅槃を得た阿羅漢の生前と死後の境涯を表す：

> vuttaṃ hetaṃ bhagavatā vuttamarahatā ti me sutaṃ. dvemā bhikkhave nibbānadhātuyo. katamā[12] dve? saupādisesā[13] ca nibbānadhātu anupādisesā ca nibbānadhātu. katamā[14] bhikkhave saupādisesā nibbānadhātu? idha bhikkhave bhikkhu arahaṃ hoti khīṇāsavo vusitavā katakaraṇīyo ohitabhāro anuppattasadattho parikkhīṇabhavasaṃyojano sammadaññāvimutto. tassa tiṭṭhanteva pañcindriyāni yesaṃ avighātattā manāpāmanāpaṃ paccanubhoti, sukhadukkhaṃ paṭisaṃvediyati[15]. tassa yo rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo, ayaṃ vuccati bhikkhave saupādisesā nibbānadhātu. katamā ca bhikkhave anupādisesā nibbānadhātu? idha bhikkhave bhikkhu arahaṃ hoti khīṇāsavo vusitavā katakaraṇīyo ohitabhāro anuppattasadattho parikkhīṇabhavasaṃyojano sammadaññāvimutto. tassa idheva bhikkhave sabbavedayitāni anabhinanditāni sītibhavissanti, ayaṃ vuccati bhikkhave anupādisesā nibbānadhātu. imā kho bhikkhave dve nibbānadhātuyo ti. etam-atthaṃ bhagavā avoca, tatthetaṃ iti vuccati:
>
> duve imā cakkhumatā pakāsitā
> nibbānadhātū anissitena tādinā /

ekā hi dhātu idha diṭṭhadhammikā
saupādisesā bhavanettisaṅkhayā /
anupādisesā pana samparāyikā
yamhi nirujjhanti bhavāni sabbaso //

ye etad-aññāya padaṃ asaṅkhataṃ
vimuttacittā bhavanettisaṅkhayā /
te dhammasārādhigamā khaye ratā
pahaṃsu te sabbabhavāni tādino ti //

ayam-pi attho vutto bhagavatā iti me sutan-ti.

「まさに次のように世尊は言った。ひとりの阿羅漢は言った。」と私は聞いた。「托鉢修行者たちよ，涅槃の要素にこれら 2 つがある。2 つとは何か？燃料の残余がある涅槃の要素［有余依涅槃界］と燃料の残余がない涅槃の要素［無余依涅槃界］とである。托鉢修行者たちよ、有余依涅槃界とは何か？托鉢修行者たちよ、この世で漏が滅せられ、完成していて、為すべきことを為し終え、重荷を下ろし、正しい目的を達成し、誕生への縛りがすっかり滅せられ、正しく智によって解放されている托鉢修行者は阿羅漢となる。その者の 5 つの感覚器官はまさに状態を保っていて、それらは打ち倒されていないので、快と不快を経験し、楽と苦を感じる。そういう人に、熱望の滅、憎しみの滅、迷妄の滅が［あれば］、托鉢修行者たちよ、これが有余依涅槃界と言われる。そして托鉢修行者たちよ、無余依涅槃界とは何であるか？托鉢修行者たちよ、この世で漏が滅せられ、完成していて、為すべきことを為し終え、重荷を下ろし、正しい目的を達成し、誕生への縛りがすっかり滅せられ、正しく智によって解放されている托鉢修行者は阿羅漢となる。托鉢修行者たちよ、他ならぬこの世において、彼の感受されているもの全てが、喜ばれないものとして冷たくなるであろう。托鉢修行者たちよ、これが無余依涅槃界である。実に托鉢修行者たちよ、こ

れらが 2 つの涅槃の要素である」と。このことを世尊は言った。そこで、次のことが説かれた。

> これら 2 つの涅槃の要素は、心眼を持つ者によって
> 依存なきそのような聖者によって明らかにされた。
> 一方の要素は、この世における現世に属することであり、
> 燃料の残余のある状態であり、誕生へと導くことを完全に滅している。
> 燃料の残余のない状態とは、将来に属することであり、
> そのようなところにおいては、諸々の誕生は全てにおいて停止されている。
>
> 形成されていない境地をこのように知って、
> 心解脱し、誕生へと導くことを完全に滅している人々、
> そういう人々は、ダルマの真髄に到達することによって、滅尽を喜んでいる。
> 彼らは、そういう聖者たちとして全ての誕生を捨て去った。

このことをまた世尊は説いた、と私は聞いている。

上記を整理すると、次のことがいえる。

有余依涅槃界と無余依涅槃界に共通する条件は、阿羅漢であること、つまり、生前に涅槃を得ている状態を表す。

有余依涅槃界は、「熱望の滅，憎しみの滅，迷妄の滅」とあり、これは散文における涅槃の定義と合致する（SN IV pp. 251, 261）：

> rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo idaṃ vuccati nibbānanti.
> 熱望の滅，憎しみの滅，迷妄の滅，これが涅槃と言われる[16]。

熱望（rāga）、憎しみ（dosa）、迷妄（moha）は、渇愛（taṇhā）、漏（āsava）等とともに、註釈文献では、煩悩（kilesa）と総称され、煩悩の滅は、生前の涅槃の解釈として多用される[17]。

無余依涅槃界にのみ見られる条件である「他ならぬこの世で、彼の感受されているもの全てが、喜ばれないものとして冷たくなるであろう」は、未来形で語られる。従って、阿羅漢が将来この状態になれば、ということであり、それはいつかと言うと、阿羅漢の命終時を示唆する。この世で命が尽き、まだそこに身体が残されているが、既にその者は「無余依涅槃界」に入っていることを表す[18]。散文中の「他ならぬこの世で」（idheva）は、偈文の「将来に属すること」（samparāyikā）と一見矛盾するが、この世で迎える命終以降という意味で「将来」を使っていると推測できる。

註釈 It-a において二種涅槃界の有余依と無余依の違いは「五蘊（心身の構成要素）」（p. 165: upādi khandha-pañcakaṃ）、つまり身体機能の有無と解説される。

1.2. 無余依涅槃界の定型句

パーリ語初期仏教経典中、有余依涅槃［界］は他に使用例が見られず、無余依涅槃［界］は、DN II pp. 72−168［第 16 経］「大般涅槃経[19]」の散文部分に定型句「無余依涅槃界に般涅槃する／した・している」（anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuta）として、命終を明確に示す pari が付された諸々の涅槃の語彙とともに使用される。この定型句は本経に 5 回出てくる。以下に挙げる 1 例は、チュンダの托鉢食を食べ、病気となり、クシナーラーへと移動した世尊の皮膚の色が清浄で純白であることに気付いたアーナンダに対し、世尊が語った言葉である（DN II p. 134）：

> evam etaṃ Ānanda. dvīsu kho Ānanda[20] kālesu ativiya Tathāgatassa parisuddho[21] hoti chavi-vaṇṇo pariyodāto. katamesu dvīsu? yañ ca Ānanda rattiṃ Tathāgato anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambujjhati, yañ ca rattiṃ

anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati.

アーナンダよ、これはその通りです。アーナンダよ、2つの時において、如来の肌の色が清まり、極めて清浄になります。どんな2つであるか。アーナンダよ、如来が無上の正しい覚りに目覚めた夜と、無余依涅槃界に般涅槃する夜にです。

本経の註釈 Sv では「無上の正しい覚り」を、経典には現れない定型句「有余依涅槃界に般涅槃する」を用いて説明する[22]。このように、註釈文献において、二種涅槃界の定型句が確立していたことが確認できる。

パーリ聖典中、後代の成立とされる Sn Ch. 4; 5 の註釈的聖典 Nidd I; II においては、Nidd I には「涅槃界」は全く用いられず、Nidd II p. 25 他に無余依涅槃界の定型句（anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbuto）が現れる。このことから、パーリ語初期仏教経典と註釈文献の間に位置する註釈的聖典の時代においても二種涅槃界はまだ成立していなかったといえよう。従って、二種涅槃界が説かれる It 第 44 経は、特異な位置づけであるといえよう。またこの文献的事実から、DN「大般涅槃経」は、散文経典の比較的後代の成立であろうとも推測され得る。

散文に見出せる無余依涅槃界の定型句は、他では DN III p. 135、AN II p. 120、AN IV pp. 202; 313、Ud pp. 55; 85、It p. 121 に見出せる。DN III pp. 117−141［第 29 経］「浄信経[23]」p. 135 では、上記の後半部分と同じ表現で、「如来が無上の正しい覚りに目覚めた夜と、無余依涅槃界に般涅槃する夜にです」と世尊が語る。また、AN II p. 120 第 4 集 ケーシーの章 No. 118 では、「大般涅槃経」DN II p. 140 とほぼ同じ表現が見出せる：

“idha Tathāgato anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto” ti bhikkhave saddhassa kulaputtassa dassanīyaṃ saṃvejanīyaṃ ṭhānaṃ.

「ここで如来が無余依涅槃界に般涅槃した」と比丘たちよ、信ある良家の子息にとっては目に美しい感動する場所［である］と。

ここの bhikkhave 部分が「大般涅槃経」では Ānanda であり、両経とも 4 つの感動する場所の 1 つとして世尊が語る。

このように、散文経典における本定型句の使用には重複が見られ、限定的であることが確認できる。

1.3. parinibbāyati および parinibbuta

上記「大般涅槃経」においては、定型句のみならず、命終を明確に示す parinibbāyati および parinibbuta が多用される。

ゴータマ・ブッダが自身の命終を「般涅槃する」と語る場面も数多くあり、以下に 1 例を挙げる（DN II p. 99）：

> atha kho Bhagavato etad ahosi : ‘ na kho me taṃ patirūpaṃ yo ’haṃ anāmantetvā upaṭṭhāke anapaloketvā bhikkhu-saṃghaṃ parinibbāyeyyaṃ’
> そこで世尊にこのことが生じた。「私が従者達に告げることなく、托鉢の修行者の集団に伝えず、般涅槃するであろうことは、私にとって適切であろうか」

DN 全 34 経中に parinibbuta の主格 parinibbuto は 31 例見出せるが、1 例を除き 30 例が本経に現れる[24]。本経中の最後の用例は、世尊の舎利を 8 ヶ所に分配し終えた後に，ピッパリヴァナに住むモーリヤ族が世尊の般涅槃を耳にする場面である（DN II p. 166）：

> ‘Bhagavā kira Kusinārāyaṃ parinibbuto’ ti.
> 「世尊がクシナーラーにおいて般涅槃されたらしい」と。

本経以外の DN 中の parinibbuto の残り 1 例を見ておこう。DN III pp. 36−57［第 25 経］「ウドゥンバリカ経[25]」において、ウドゥンバリカの遊行者の園に滞在中であるニグローダ遊行者に対して、世尊が説法する。その中で

parinibbuta と parinibbāna が使用される（DN III p. 55）：

> parinibbuto so Bhagavā parinibbānāya dhammaṃ desetīti.
> 般涅槃しているかの世尊は、般涅槃のためダルマ（教え／真理）を説示する、と。

ここでの世尊は、ゴータマ・ブッダであり、自身について「般涅槃している」と述べる。文脈は現世・生前のことである。また「般涅槃のために」と、般涅槃が目的の対象としても出てくる。ここで目的とされる parinibbāna の具体的内容と時点に関しては、本経中に明示されてはいないが、般涅槃しているブッダ自身が他者も同じ般涅槃の境地に至るよう説示するのであるから、この般涅槃も生前の涅槃の可能性が高いといえるであろう。

このように、同じ DN 中であっても、経によって同じ涅槃の語彙が示す涅槃の時点が異なることが確認できる。

1.4. 生前の涅槃を表す「取り込むことのない般涅槃」unupādāparinibbāna

パーリ語初期仏教経典中、散文において、無余依にあたる unupādisesa と同じ un-upa-ā-√dā の派生語である unupādā の複合語 unupādāparinibbāna[26]「取り込むことのない般涅槃」が使用される。本成句は、生前の涅槃を明確に示し、MN I p. 148、MN III p. 187、SN IV p. 48、SN V p. 29、AN I p. 44、AN I p. 142（MN III p. 187 と同じ）に現れる。さらに AN IV pp. 70−74 第 7 集 無記の章 LII においても、取り込むことのない般涅槃（anupādā ca parinibbānaṃ）と人の［死後の］7 つの行き先が説かれる[27]。この成句は、煩悩・執着が滅していて、これ以上の取り込み・取著がない生前に得られる涅槃の境地を表しており、同じ原意からの派生でありながらも、前述の命終［後］のみを示す無余依涅槃界とは、涅槃の時点が異なる。

2. 涅槃を伴わない有余依（saupādisesa）無余依（anupādisesa）の表現

2.1. 有余依・無余依併記の用例

パーリ語初期仏教経典中、本両語が涅槃を伴わず併記される例は、散文経典に 2 経見出せる。

MN II pp. 252–261 第 105 経「スナッカッタ経」後半部分に、射られた毒矢を抜き、毒素（visadosa）を除き、毒素の残余がある、あるいは毒素の残余がないという文脈で sa-upādisesa および anupādisesa が複数回現れる[28]。そして毒素とは無明（p. 260: avijjāvisadoso）であると説示される。

AN IV pp. 74–79 第 7 集 無記の章 LIII においても本両語が繰り返し併記される。本経では、冒頭部分で「燃料の残余のない、よく解放されている［者達］」（anupādisesā suvimuttā）との表現の後、2 度めからは「よく解放されている」（suvimutta）が省略され、その「燃料の残余がある、残余がない」がどうしてわかるのか、と言う文脈で両語が繰り返し出てくる。従って、本経における燃料（upādi-）は取著・煩悩を表す。

2.2. 有余依のみの用例

パーリ語初期仏教経典において、有余依にあたる saupādisesa および接頭辞 sa- が付加されていない upādisesa が涅槃の語彙を伴わず単独に現れることがあるが、使用例は非常に限定的であり、以下に示す Sn 354、AN IV pp. 378–382、MN I p. 62 に見出せるのみである。

Sn「ヴァンギーサ経」中、ヴァンギーサが世尊に亡くなったニグローダ・カッパ師について尋ねるが、その中で「燃料の残余のある」（saupādisesa）が現れる（Sn 354）：

nibbāyi so ādu saupādiseso

涅槃したのでしょうか、それとも燃料の残余があるので［涅槃しなかったので］しょうか[29]

文脈から、ここの燃料は取著・煩悩のことである。

さらに、Sn Ch. 3 第 12 経「二種の考察経[30]」では冒頭の散文部分で、修行に励む者の 2 種の果報として「現世の理解、あるいは燃料の残余があれば不還の状態である」（p. 140: diṭṭhe va dhamme aññā, sati vā upādisese anāgāmitā）と、即ち、現世での覚り、あるいは、修行途中で亡くなればこの世に再び戻ることがない不還の状態となると世尊が説く。同じ表現が MN I p. 62 にも使用され、同じく未だ煩悩を残す修行段階にいて、涅槃へと至っていないことを表す[31]。

また、AN IV pp. 378–382 第 9 集 獅子吼の章 XII では、世尊がサーリプッタに、「燃料の残余を持って死につつある時」（p. 379: puggalā sa-upādisesā kālaṃ kurumānā）、三悪趣（地獄・餓鬼・畜生界）から解放される、と説く。ここでの燃料も取著・煩悩を表す。本散文経典 AN では、死後三悪趣に生まれ落ちることがない 9 種の人たちについて語られる[32]。

このように、生前に涅槃へと至れず、未だ修行半ば、取著・煩悩の残余がある状態で亡くなった者に関する修行の果報への関心の高さが垣間見られ、散文経典の発展とともに、様々な具体的な行き先を伝える必要が生じていったことが窺える。

上記の用例考察から、(sa-)upādisesa が単独で人に対して使用される場合は、upādi- は取著・煩悩を意味し、その者は、いまだ修行途中であり、涅槃へは至っていない状態を表すことが確認される。

2.3. 無余依のみの用例

パーリ語初期仏教経典において、涅槃を伴わない無余依の単独使用が見出せるのは以下 1 経のみである。

最古層 Ch. 4 第 11 経「論争経[33]」において、言い争いが批判されるが、その中で「燃料の残余のない」（anupādisesa）が出てくる（Sn 876）：

“ettāvat’ aggam pi vadanti h’eke
yakkhassa suddhiṃ idha paṇḍitāse,
tesaṃ pun’ eke[34] samayaṃ vadanti
anupādisese kusalā vadānā.
このことだけでもっても、ある賢者達は、
この世で、ヤクシャの最高の清浄を説く。
彼らのある者達は、一方、燃料の残余のない（涅槃）について
（自分のことを）匠と言いつつ、教説を説く。

註釈 Pj II p. 553 によると、本偈の「ある者達」を常住論（sassatavāda）に対抗する断滅論（ucchedavāda）を説く者達として、燃料の残余のない状態（anupādisesa）を無余依涅槃と理解し、命終後の議論と解釈する。筆者は、この場合、燃料は上記有余依の用例同様、取著・煩悩との理解でよく、「取著・煩悩のない（涅槃）」との意味で、生前でも命終でも解釈可能であると考える[35]。

ここまでの考察から、It 第 44 経において、有余依涅槃界が涅槃を得た者の生前の境涯、無余依涅槃界がその者の命終［後］の境涯との内容で説かれている以上、二種涅槃界においては、註釈（前述 1.1. It-a p. 165）の解釈通り upādi- を五蘊、即ち、身体機能と理解する必要があり、従って、この場合の upādi- の語義は、他の用例で見られる取著・煩悩（upādāna［upa-ā-√dā］）ではなく、所有物（upadhi［upa-√dhā］）であると理解すべきであろう。このような語義と用法は、パーリ経典の涅槃界特有であると言わざるを得ない[36]。

散文経典成立の終盤に初めて設定されたと推測される無余依涅槃界という成句は、涅槃観の変遷において大きな契機となったといえるであろう。

3. 生前から命終へ

3.1. 冷たくなる（sīti-√bhū）

ここで It 第 44 経と同じ「他ならぬこの世において、感受されているもの全てが、喜ばれないものとして冷たくなるであろう」が出てくる MN III pp. 237–247［第 140 経］「界分別経[37]」を検討する。

本経のあらすじは、世尊がヴァッガヴァのところに滞在中、先にそこに留まっていたプックサーティに対し説法をして、喜んだプックサーティが具足戒を受けるため鉢と衣を求めて出かけたが、一頭の牝牛が迷走してきて彼の命を奪ってしまう。その後、彼の来世を尋ねる修行僧たちに、世尊は、プックサーティは般涅槃者（parinibbāyin）になったと告げる。以下 nibbāyati および nibbāna が、その説法中に用いられる（MN III p. 245）：

> seyyathāpi, bhikkhu, telañ ca paṭicca vaṭṭiñ ca paṭicca telappadīpo jhāyati, tass' eva telassa ca vattiyā[38] ca pariyādānā aññassa ca anupāhārā[39] anāhāro nibbāyati, —evam eva[40], bhikkhu, kāyapariyantikaṃ vedanaṃ vediyamāno: kāyapariyantikaṃ vedanaṃ vediyāmīti pajānāti; jīvitapariyantikaṃ vedanaṃ vediyamāno[41] : jīvitapariyantikaṃ vedanaṃ vediyāmīti[42] pajānāti; kāyassa bhedā[43] uddhaṃ jīvitapariyādānā idh' eva sabbavedayitāni anabhinanditāni[44] sītibhavissantīti pajānāti. tasmā evaṃ samannāgato bhikkhu iminā paramena paññādhiṭṭhānena samannāgato hoti. esā hi, bhikkhu, paramā ariyā paññā yadidaṃ sabbadukkhakkhaye ñāṇaṃ. tassa sā vimutti sacce[45] ṭhitā akuppā hoti. taṃ hi[46], bhikkhu, musā yaṃ mosadhammaṃ, taṃ saccaṃ yaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ; tasmā evaṃ samannāgato bhikkhu iminā paramena saccādhiṭṭhānena samannāgato hoti. etaṃ hi[47], bhikkhu, paramaṃ ariyasaccaṃ, yadidaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ.
>
> 托鉢修行者よ、ちょうど油に縁ってまた灯心に縁ってオイルランプが燃え

て、他ならぬその油と灯心の尽き果てること故に、また別の物の供給がない故に、燃料がない［オイルランプの灯火］が消えるように、他ならぬこのように托鉢修行者よ、身体がある限りにおいての感受作用を経験すれば［私は］身体がある限りにおいての感受作用を経験していると理解する。命がある限りにおいての感受作用を経験すれば［私は］命がある限りにおいての感受作用を経験していると理解する。身体の分解から、命が尽き果てた後、他ならぬこの世において、感受されているもの全てが喜ばれないものとして冷たくなるだろうと理解する[48]。それ故、このように体得した托鉢修行者は、この最高の理解力という支えを体得した者となる。というのも托鉢修行者よ、これは最高の立派な理解力—即ち、一切の苦しみの滅尽に関する理解であるから、その人にとって、その解脱は真実に立脚していて揺るぎないものとなる。何故なら托鉢修行者よ、虚偽なるダルマ（真理）は虚妄であり、虚妄ならざるダルマ［つまり］涅槃は真実であるためだ。それ故このように体得した托鉢修行者は、この最高の真実という支えを体得した者となる。というのは托鉢修行者よ、これは立派な人にとっての最高の真実—即ち、虚妄ならざるダルマ［つまり］涅槃であるためだ。

ここでは、It 第 44 経には現れない「身体の分解から、命が尽き果てた後」という表現が追記されており、命終後であることが明示されている。そして、灯火が消える喩えが、命が尽きることにかけられていて、自身の命終後について「感受されているもの全てが喜ばれないものとして冷たくなるだろうと理解する」こととあり、It 第 44 経同様、「冷たくなる」のは命終［後］であることを示して、その状態を「理解する」と説示される。なお、ここで語られる涅槃（nibbānaṃ）の時点は判別できない。

古層（最古層以外の韻文）の例えば Sn 542 では、世尊のことが sītibhūta「冷たく［清涼に］なっている」お方と称えられ[49]、さらに、MN I p. 171 偈文ではゴータマ・ブッダが自身のことを、sītibhūta であり、nibbuta であると語る[50]。従って、sītibhūta が明確に現世・生前の文脈で使われており、また散文

においても、sītibhūta が nibbuta と共に存命中の人に使われる場合も見出せる（例：MN I p. 341 他）[51]。

韻文から散文へと移行するにつれ、それまでは、同じ語が示す時点が生前を示唆する場合が大半であったが、命終［後］であることを明示するようになり、その未来の状態を理解する文脈と涅槃が結び付けられるようになることが確認される。

3.2. 火が消える喩え

さらにもう 1 点、火が消える喩えの時点についても、上記散文「界分別経」では、オイルランプの油と灯心が尽き果てて火が消えることと、身体の分解後、命が尽き果てることがかけられており、この喩えは明確に命終を示す。

火が消える喩えは、MN I pp. 483−489［第 72 経］「アッギ・ヴァッチャ姓の人の経[52]」にも見出せる。本経は、ヴァッチャが十無記[53]および心解脱（vimuttacitto）した比丘の生まれ変わり（upapajjati）について質問し、ブッダが全て「あてはまらない」（na upeti）と、答えない・無記の立場をとりつつ、どこへ生まれ変わるかという質問に対して、消えた火に喩えて話を展開する[54]。本経では、草木という燃料（tiṇakaṭṭhupādānaṃ）の補給がないため火が消えている（aggi nibbuto）と説き、どこへ生まれ変わるかに関しては答えていない。

このように解脱者の死後についての関心は非常に高く、ゴータマ・ブッダに尋ねる場面が様々見られる。前述の「大般涅槃経」の冒頭部分においても、アーナンダが亡くなった修行者達の行き先（gati）・将来（abhisamparāya）について尋ね、ブッダは、その者たちは「化生者となりそこで（天界で）般涅槃者」（DN II p. 92: opapātikā tattha parinibbāyinī）となる、と答える。この者達は、生前に涅槃の境地へ至れずに亡くなった者達であるが、次に、生前に阿羅漢であった者の行き先を問われると、ブッダは現世での境地のみ説明し、死後については語らない[55]。

上記「界分別経」とは対照的に、韻文では、火が消える喩えが生前の文脈で

語られる（例：Sn 19, 235, 591）。1 例を挙げると、Sn Ch. 1 第 2 経「ダニヤ経」中、牛飼いダニヤが「自分の小屋は覆われ火が灯されている」（Sn 18）と語った後、世尊は、「私は怒ることなく、心の頑迷さを離れている。マヒー河のほとりで一夜を過ごしている。小屋はあばかれ、火は消えている（nibbuto gini）。そこで、神よ、もし望むなら、雨を降らせよ。」（Sn 19）と、ゴータマ・ブッダが自身の状態を「火が消えている」と語る[56]。

上記に示した生前から命終への涅槃観の変遷は、命終時に真に達成されるという涅槃観が次第に主流になっていくことを示唆するものである。

おわりに

本稿では、パーリ語初期仏教経典中、It 第 44 経において唯一説かれる二種涅槃界の内容を考察し、他経に有余依涅槃界は見出せず、「無余依涅槃界に般涅槃する」という定型句がゴータマ・ブッダの命終に焦点をあてた DN 第 16 経「大般涅槃経」を中心に、限定的に使用されていることを確認した。さらに註釈的聖典 Nidd I; II においても有余依涅槃界という成句が現れないことから、無余依涅槃界が先に散文経典時代の終盤に成立し、有余依・無余依涅槃界の対句として二種涅槃界の教理が確立するのは、註釈文献の成立まで下ることが推測され、It 第 44 経が特異な位置づけであることが明らかとなった。

また、無余依にあたる unupādisesa と同じ un-upa-ā-√dā の派生語である unupādā の複合語 unupādāparinibbāna「取り込むことのない般涅槃」が複数経に現れ、取り込むことは取著・煩悩を意味し、明確に生前の涅槃を表すこと、それから、有余依、無余依が単独で人に使用される用例からも upādi-「燃料」が取著・煩悩を意味することから、涅槃界の教理においてのみ、upādi- が、所有物（＝upadhi）、つまり自分の所有物という語義から、五蘊・身体機能を意味することが確認された。

さらに、当初は生前の文脈であった同じ表現が次第に命終を示す例も見られるようになり、pari が付された涅槃の語彙においても、古層とされる韻文経典

から使用され始めるが[57]、散文を含めても、明確に生前を示す場合や涅槃の時点が判別できない用例も見出せた。

また、「身体の分解から命が尽き果てた後」など、はっきりと命終を表す表現が散文において使用されるようになり、生前に自身の将来を理解するという文脈も現れることを指摘した。

最古層経典から、ブッダの発話においては、「現世において」（diṭṭhadhamma）を用いて、生前に涅槃を獲得すべきと強調される説示も見られるが[58]、同じく最古層において nibbāna が「老死の滅尽[59]」と定義づけられることに関連して、死や輪廻、将来を話題にする経も Sn には複数確認され[60]、さらに、最古層 Ch. 5 第 7 経「バラモン学生ウパシーヴァの質問経[61]」のように、最古層の時代から当時の人々の間で、死や死後について、そして輪廻から解脱し涅槃を得ることに大きな関心があったことが裏付けられる。この傾向は散文経典の時代においても同様であり、従って、涅槃が人々の間で命終［後］と解釈され得る側面は、最初期からずっと変わらずあったといえるであろう。しかし、そんな中においても、ゴータマ・ブッダの真意は、涅槃は生前で得られ、命終を経てもその境地は変わらないと伝えようとしていたと筆者は推測する。それ故、解脱者の命終後を問う質問に、ゴータマ・ブッダは答えなかったり、現世で得られた境地の説示で返したのである。

しかしながら、ゴータマ・ブッダの命終後、解脱者の命終後の境涯への関心は益々高くなり、涅槃の語彙や併記表現が命終［後］を明確に表す用例も散見されるようになり、散文経典の成立期終盤に、無余依涅槃界が設定されるに至ったのではないかと考えられる。そして、その後、有余依涅槃界という対句も現れはしたが、パーリ語初期仏教経典の最も終盤の時期であったため、It 第 44 経以外で使用されることなく、註釈文献の時代になって、ようやく二種涅槃界の教説が定着したといえよう。

略号および一次文献・辞書類

AN = *Aṅguttaranikāya*: Richard Morris（ed.）, Part I［1961］Second edition, First published 1885, Part II［1976］First published 1888, E. Hardy（ed.）, Part III［1976］First published 1897, Part IV［1958］First published 1899, Part V［1958］First published 1900, London: Pali Text Society.

Be = ビルマ版：［2008］Chaṭṭha Saṅgāyana Tipiṭaka version 4.0, Vipassana Research Institute.

Ch. = Chapter

Cone I = *A Dictionary of Pāli,* Part I: Margaret Cone［2001］Oxford, Bristol.

CPD II = *A Critical Pāli Dictionary,* Vol. II: V. Trenckner et.al.（eds.）［Vol. II: 1960−1990］Copenhagen.

DN = *Dīghanikāya*: T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter（eds.）, Vol. I［1975］First published 1890, Vol. II［1966］First published 1903, J. Estlin Carpenter（ed.）, Vol. III［1976］First published 1911, Index compiled by M. Yamazaki, Y. Ousaka, K. R. Norman and M. Cone［1997］London: Pali Text Society.

Ee = PTS 版：European edition, Pali Text Society.

ed./eds. = editor/editors

esp. = especially（特に）

It = *Itivuttaka*: Ernst Windisch（ed.）［2010］First published 1889, Bristol: Pali Text Society.

It-a = *Paramatthadīpanī*（Itivuttaka-aṭṭhakathā）of Dhammapālācariya: M. M. Bose（ed.）［1977］Vols. I; II, First published Vol. I 1934; Vol. II 1936, London: Pali Text Society.

MN = *Majjhimanikāya*: V. Trenckner（ed.）, Vol. I［1979］First published 1888, Robert Chalmers, Vol. II［1977］First published 1896, Vol. III［1977］First published 1899, Mrs. Rhys Davids（ed.）, Vol. IV［1974］First published 1925, London: Pali Text Society.

Nidd I = *Mahāniddesa*: L. Dela Vallée Poussin and E. J. Thomas（eds.）［2001］First published 1916, Oxford: Pali Text Society.

Nidd II = *Cullaniddesa*: W. Stede（ed.）［1988］First published 1918, Oxford: Pali Text Society.

PED = *Pali-English Dictionary*: Rhys Davids & William Stede［1921−25］Oxford: Pali Text Society.

Pj II = *Paramatthajotikā* II: Helmer Smith（ed.）, Vol. I［2009］, First published 1916, Vol. II［1989］First published 1917, Oxford: Pali Text Society.

Ps = *Papañcasūdanī*（Majjhimanikāya-aṭṭhakathā）of Buddhaghosācariya: J. H. Woods and D. Kosambi（eds.）, Part I［1977］First published 1922, Part II［1979］First published 1928, I. B. Horner（ed.）, Part III［1976］First published 1933, Part IV; V［1977］First published Part IV 1937; Part V 1938, London, Pali Text Society.

Se = タイ版：［1994］Siamese edition, CD-ROM version 4, Bangkok, Mahidol University Computing Center.

Skt. = Sanskrit

SN = *Saṃyuttanikāya*: M. Léon Feer（ed.）Part I［1991］First published 1884, Part II

［1989］First published 1888, Part III［1975］First published 1890, Part IV［1990］First published 1894, Part V［1976］First published 1898, Oxford: Pali Text Society.
Sn = *Suttanipāta*: Dines Anderson and Helmer Smith［2010］First published 1913, Oxford: Pali Text Society.
Spk = *Sāratthappakāsinī*（Saṃyuttanikāya-aṭṭhakathā）Buddhaghosa's Commentary: F. L. Woodward（ed.）, Vol. I［1977］First published 1929, Vol. II［1977］First published 1932, Vol. III［1977］First published 1937, London: Pali Text Society.
Sv = *Sumaṅgalavilāsinī*（Dīghanikāya-aṭṭhakathā）, Buddhaghosa's Commentary: T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter（eds）, Part I［1968］Second edition, First published 1886, W. Stede, Part II［1971］Second edition, First published 1931, Part III［1971］Second edition, First published 1932, London: Pali Text Society.
s.v. = *sub verbo*（・・・という語を見よ）
T = 大正蔵：［1924−1934］『大正新脩大蔵経』大蔵出版.
Ud = *Udāna*: Paul Steinthal（ed.）［2002］First published 1885, Oxford: Pali Text Society.
Vol. = Volume

二次文献

赤沼　1958 = 赤沼智善［1958］『漢巴四部四阿含互照録』破塵閣書房.
荒牧・本庄・榎本 2015 = 荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄［2015］『スッタニパータ［釈尊のことば］全現代語訳』講談社学術文庫.
Collins 2010 = Steven Collins［2010］*Nirvana: Concept, Imagery, Narrative.* Cambridge: Cambridge University Press.
榎本 2012 = 榎本文雄［2012］「初期仏典における涅槃―無我説と関連して―」『仏教研究』第 40 号，pp. 149−160.
榎本 2007 = 榎本文雄［2007］「輪廻思想と初期仏教」『シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集』No. 9, pp. 5−13.
藤田 1988 a = 藤田宏達［1988］「涅槃」『岩波講座・東洋思想　インド仏教　2』第 9 巻，岩波書店，pp. 264−286.
藤田 1988 b = 藤田宏達［1988］「原始仏教における涅槃―nibbāna と parinibbāna―」『印度學佛教學研究』第 37 巻，第 1 号，pp. 1−12.
畑 2002 = 畑昌利［2002］「初期仏典における断滅論の諸相」『待兼山論叢』第 36 号哲学篇，pp. 33−49.
片山 2005 = 片山一良［2005］『パーリ仏典　第 2 期 5　長部（ディーガニカーヤ）パーティカ篇 I』大蔵出版.
片山 2001 a = 片山一良［2001］「パーリ仏教における涅槃」『駒澤大學佛教學部研究紀要』第 59 號，pp. 462−478.
片山 2001 b = 片山一良［2001］『パーリ仏典　第 1 期 5　中部（マッジマニカーヤ）後分五十経篇 I』大蔵出版.
宮下 1989 = 宮下晴輝［1989］「涅槃についての一考察」『大谷學報』第 69 巻，第 1 号，

pp. 17−35.
村上・及川 1989＝村上真完・及川真介［1989］『仏のことば註（四）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.
村上・及川 1988＝村上真完・及川真介［1988］『仏のことば註（三）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.
中村 1984＝中村元［1984］『ブッダのことば—スッタニパータ—』岩波書店.
中村 2007＝中村隆海［2007］「Veda 文献における *pra√jñā* の語義と用法」『松濤誠達先生古稀記念　梵文学研究論集』pp. 111−137.
並川 2008＝並川孝儀［2008］『書物誕生—あたらしい古典入門『スッタニパータ』—仏教最古の世界』岩波書店.
Norman 2006＝K. R. Norman［2006］*The Group of Discourses*（*Sutta-nipāta*）, Second edition, Lancaster: Pali Text Society.
富田 2021＝富田真理子［2021］「パーリ聖典『スッタニパータ』における涅槃—註釈『パラマッタ・ジョーティカー』の解釈と比較して—」『パーリ学仏教文化学』第 34 号，pp. 1−27.
富田 2018＝富田真理子［2018］「初期仏典における涅槃の基礎的研究—『スッタニパータ』を基本資料として—」大阪大学博士学位請求論文.
Tomita 2014＝Mariko Tomita［2014］“Issues on *Nibbāna* with Special Reference to Verse No.1074 of the *Upasīvamāṇavapucchā* in the *Suttanipāta,*” *Journal of Indian Philosophy,* 44, online edition（print edition: 2016, pp. 377−391）, Springer.
富田 2012＝富田真理子［2012］「涅槃の諸相と初期仏教経典—abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について—」『日本佛教學會年報』第 77 號，pp. 1−27.
富田 2008＝富田真理子［2008］「『スッタニパータ』「ヴァンギーサ経」における涅槃について」『待兼山論叢』第 42 号哲学篇，pp. 49−66.
Waldschmidt 1950＝Ernst Waldschmidt［1950］*Das Mahāparinirvāṇasūtra; Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins.* Teil I, Berlin: Akademie-Verlag.
Wynne 2007＝Alexander Wynne［2007］*The Origin of Buddhist Meditation.* Abingdon and New York: Routledge.

注

1　本稿は PTS 版（Ee）を底本とし、適宜ビルマ版（Be）、タイ版（Se）を参照した。原典の和訳はこれまでの研究成果や翻訳を参照した上で、拙訳を掲載する。下線表示は筆者による。なお、参考文献は、注記および同一人物の場合は末尾においても、最新の成果を反映する新しいものから順に列挙する。

2　並川 2008: 125−139、宮下 1989: 24−26、藤田 1988 a: 272−273 等参照。現世の文脈で「不死へと至った［者］」（amata: Sn 204, 225, 228 等）とも描写される文献上の事実から、筆者は、解脱者には「死」を使わず「命終」と表記する（片山 2001 a: 462、宮下 1989: 26, 34 n. 13 参照）。

3　富田 2021: 10−13、富田 2018: 141−168 参照。

4　本稿においては、南方上座部パーリ聖典の中でも初期に位置づけられる仏典（経蔵五部、いわゆるニカーヤ中、後代とされるものを除く）をその範囲とする。厳密には、『ブッダヴァンサ』、『チャリヤーピタカ』、『ダンマサンガニ』、『クッダカパータ』、『カターヴァットゥ』、『パティサンビダーマッガ』、『ペータヴァットゥ』、『ヴィバンガ』、『ヴィマーナヴァットゥ』、『ヤマカ』など明らかに後代のもの、また『ニッデーサ』（Nidd）などの註釈的聖典を除外した経典（sutta）群を対象とする。

5　宮下 1989: 27、藤田 1988 b: 7 他参照。

6　本稿における「涅槃の語彙」とは、漢訳仏典の涅槃に相当する中期インド語に属するパーリ語名詞形 nibbāna（Skt.: nirvāṇa）、nibbuti（Skt.: nirvṛti）、動詞形 nibbāti; nibbāyati、過去分詞形 nibbuta およびそれらに接頭辞 pari; abhi のついた形やそれらの複合語を対象とする。

7　富田 2021; 2018 他参照。その根拠の一つとして、最古層 Sn 1094（Ch. 5 第 11 経「バラモン学生カッパの質問経」Kappamāṇavapucchā）において、ゴータマ・ブッダが涅槃の定義を「何も所有しないこと」（akiñcanaṃ）、「取り込まないこと」（anādānaṃ）、「比類なき島」（dīpaṃ anāparaṃ）に加えて、「老いと死の滅尽」（jarāmaccuparikkhayaṃ）と説いていることがある。現世の文脈でありながら、「老いと死の滅尽」、つまり生死・輪廻の滅が示唆される場合には、それが命終後のことだけなのか、あるいは今世でのことも含むのか、即ち、今世で生死・輪廻を超越したのか、によって涅槃の時点の解釈が異なるため、判別がつけられないと筆者は判断する。このような指摘は管見の限り、これまでなされていない。

8　これまでの研究成果から Sn Ch. 4 および Ch. 5（序文と結語部分を除く）が最初期であり、最古層とされる（富田 2021: 14−15 n. 8 参照）。

9　Vaṅgīsasutta. 本経では、parinibbuta が冒頭の散文部分（pp. 59−60）に 5 例および韻文に 1 例（Sn 346）、さらに動詞 nibbāyi（Sn 354）が明確に命終を表す涅槃として用いられる（富田 2021: 7−9, 24 参照）。

10　藤田 1988 b は、涅槃観の展開を、涅槃も般涅槃もそもそもは現世に関することであったが、かなり早くから「解脱者の死」を表す用法も確認でき、やがて「無余涅槃界に般涅槃する」という定型句をもって、無余涅槃界が有余涅槃界より先に成立したと解説する。

11　Be 経名：Nibbānadhātusuttaṃ. Ee には経名なし。宮下 1989: 26−29 も参照のこと。

対応する漢訳『増壹阿含経』（T2, No. 125-16, 579 a 12−23）は以下の通りである：「聞如是。一時佛在舍衞國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。有此二法涅槃界。云何爲二。有餘涅槃界。無餘涅槃界。彼云何名爲有餘涅槃界。於是比丘滅五下分結。即彼般涅槃。不還來此世。是謂名爲有餘涅槃界。彼云何名爲無餘涅槃界。如是比丘。盡有漏成無漏。意解脱智慧解脱。自身作證而自遊戯。生死已盡梵行已立。更不受有如實知之。是謂爲無餘涅槃界。此二涅槃界。當求方便至無餘涅槃界。如是諸比丘當作是學。爾時諸比丘聞佛所説。歡喜奉行」。

本漢訳は It 第 44 経とは異なり、まだ涅槃を得ていない不還の状態を「有余涅槃界」

とし、また「無余涅槃界」も生前に涅槃を得た者を表しており、命終以降を意味しない。宮下 1989: 30 は「不還が上界において阿羅漢果を得て般涅槃することを有余涅槃とする」と解説する。

「有余涅槃」の他の例は『雑阿含経』にあと 3 経見出せる。同じく不還の解釈が 1 経あり、Sn Ch. 2「ヴァンギーサ経」のパラレルである（T2, No. 99-1221, 333 a 3−333 b 18, esp. 333 a 7−8）。残り 2 経は It 第 44 経同様、生前の涅槃を示す「現法智有餘涅槃」として出てくる（T2, No. 99-738, 197 a 12−13, T2, No. 99-740, 197 a 23−24）。これらのパーリ語パラレルは SN V pp. 67−70; p. 132（赤沼　1958: 241, 244）であるが、「有余涅槃」に相当するパーリ語は無い。このように、漢訳では「有余涅槃」の解釈が 2 種類存在する。

12　Be: katame.

13　saupādisesa は、接頭辞 sa（with, 所有を表す）+ upādisesa である。複数の辞書（Cone I pp. 481−482 s.v. upādi; upādāna, PED p. 149 s.v. upādi, CPD II p. 488 s.v. upādāna）において、upādi は複合語のみで使用され、由来は upādi = upādāna（upa-ā-√dā「自分の（ā）ほうへ（upa）取り込む・執着する（√dā）」）あるいは upadhi「存在の根本要素，執着」のいずれかとされる。従って upādi = upadhi との解釈も見られる。

但し、upadhi は前つづり upa「～に・の方へ」と√dhā「置き定める」が由来で、自分の手に取る、自分のものにするということから、その者の「所有物」を表す。筆者はこの語源通り、upadhi はその人の所有物一般であり、その中には本人の存在自身や身体や所有欲も含まれ、厳密には upādi より広義であると考える。

14　Be: ca 挿入。

15　Be: -vedeti.

16　「ジャンブカーダカ相応」Jambukhādaka-saṃyutta. 遊行者であるジャンブカーダカより涅槃とは何かと問われ、サーリプッタ尊者がこう返答する。この後、そのための修行道（maggo atthi paṭipadā）があるとして、八聖道（ariyo aṭṭhaṅgiko maggo）を説く。

17　例えばここ SN IV pp. 251, 261 の註釈 Spk III p. 88 も、nibbāna を煩悩（kilesa）の滅（khaya）と説明する。

18　この点において、命終の涅槃は、藤田 1988 b: 6 が記すような「広い意味では煩悩をもつ人間存在全体の消滅」とはいえない。涅槃の原意は、本邦でよく知られる√vā[1]「吹く」由来の「（火が）吹き消された」というより、√vā[2]「（火が）消える」が正しいといえる。但し、消えるの意味は、そのモノや人全体の消滅ではなく、厳密には燃えているモノの火が消えること、または、その人の火的要素が消えることである（榎本 2012: 150−151 参照）。さらに、火葬して身体要素がなくなった後でも、涅槃を得た者の場合は消滅ではなく、見えない状態、つまり不可視化が示唆される。このことについて、畑 2002: 42 は、DN I p. 46; II pp. 13−18「修行完成者の身体は存在へと導くものが断ち切られたまま、とどまっているのですよ。（筆者略）身体の崩壊により命が尽き果てた後は、神々や人間たちはこれを見ないでしょう［畑訳］」を挙げ、「身体の崩壊後、見えなくなる」までの言及であり、消滅するかどうかは問題にされず「不可視化を意味する」のが仏教の立場であると記す。この涅槃の理解は、ゴータマ・ブッ

ダの滅後から今日まで続く、仏がおわす、という考え方につながるものであるといえよう。

19 Mahāparinibbānasuttanta. 本経では「般涅槃」として世尊の命終が大きくクローズアップして描写され多用される。世尊が命終を迎えるまでの様子を記した仏伝である。漢訳パラレルは複数経あり、『長阿含経』の中の「遊行経」(T1, No. 1-2, 11 a 2−30 b 5)、「仏般泥洹経」(T2, No. 5, 160 b 2−175 c 26)、「般泥洹経」(T2, No. 6, 176 a 1−191 a 28)、「大般涅槃経」(T2, No. 7, 191 b 1−207 c 12) とされる。本経における涅槃の語彙全用例の考察は富田 2018: 230−253 参照のこと。

20 Be：引用部分最初の Ānanda 以降 evametaṃ, ānanda dvīsu.

21 Be; Se: kāyo parisuddho.

22 本経中の鍛冶工チュンダの食事供養に関する註釈 (Sv pp. 571−572)：

Bhagavā hi Sujātāya dinnaṃ piṇḍapātaṃ paribhuñjitva saupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto, Cundena dinnaṃ paribhuñjitvā anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto ti: evaṃ parinibbāna-samatāya pi sama-phalā

なぜなら、世尊は、スジャーターによって布施された托鉢食を食べて、有余依涅槃界に般涅槃し、チュンダによって布施された［托鉢食を］食べて、無余依涅槃界に般涅槃した、と。このように般涅槃の等しさにおいても同じ果報［である］

Skt. パラレル (トルファン出土 Waldschmidt 1950: 280) では、'nupadhiśeṣe nirvāṇ- (adhātau parinirvāsyate) とあり、所格活用である。

23 Pāsādikasutta. ここでは覚りは生前、般涅槃は命終と明確に区別されているが、本経中には、覚りと涅槃が同義的に併記される定型表現も見出せる。四つの安楽の実践が「厭離のためであり、熱望から離れることのためであり、滅のためであり、鎮まりのためであり、理解 (力) のためであり、正しい覚りのためであり、涅槃のため」(nibbidāya virāgāya nirodhāya upasamāya abhiññāya sambodhāya nibbānāya) と世尊が説示する (D III p. 131 他)。本経に関しては片山 2005: 231−290 も参照のこと。

24 「大般涅槃経」には、parinibbuta を含む pari が付された涅槃の語彙が集中的に使用され、DN 中の涅槃の語彙全 164 例中 135 例が本経に現れる (富田 2018: 235 および DN index pp. 200−201 参照)。

25 Udumbarikasutta. 片山 2005: 80−124 参照。

26 Ee: anupādā parinibbāna を Be に倣い修正。

27 Avyākata-vagga LII. 7 つの死後の行き先とは、中般涅槃者 (antarāparinibbāyin) 3 種類、ぶつかってから般涅槃する者 (upahaccaparinibbāyin)、無行般涅槃者 (asaṅkhāraparinibbāyin)、有行般涅槃者 (sasaṅkhāraparinibbāyin)、上向きの流れを持ちアカニッタ天へ行く者 (uddhaṃsoto akaniṭṭhagāmin) である。同様の教理は、差異はあるものの AN に一定数見出せる (AN I pp. 232−235; II pp. 133−134; IV pp. 12−15; IV pp. 378−382 (後述 2.2. および注 32 参照)；V pp. 119−120)。このように散文経典では、天界で般涅槃するというような涅槃観の多様化が見られる。

28 Sunakkhattasutta. リッチャビ族の王子であるスナッカッタへ世尊が説法する経である。片山 2001 b: 111−125 参照。

29 「ヴァンギーサ経」に関しては富田 2008 参照のこと。

30 Dvayatānupassanāsutta. 本経中の涅槃の用例に関しては、富田 2021: 26–27; 2018: 91–94 参照のこと。

31 MN I pp. 55–63 第 10 経「念処経」Satipaṭṭhānasutta. 本経では世尊が涅槃を目の当たりにするためのひとつの道として、四念処（cattāro satipaṭṭhānā）について説示し、その果報としてこの 2 種を示す。

32 Sīhanāda-vagga XII. 9 種のうち 5 種については、中般涅槃者から上向きの流れを持ちアカニッタ天へ行く者まで前述（注 27 参照）と同様の順番を示す。その後、第 6 が一来（sakadāgamin）で、第 7 が一種者（ekabījin）、第 8 が家々の者（kolaṅkola）、第 9 が最大 7 回の者（極七変生者：sattakkhattuparama）と説明される。

33 Kalahavivādasutta. 荒牧・本庄・榎本 2015: 231–236、Norman 2006: 108–109、村上・及川 1988: 723–742、中村 1984: 190–193 参照。

34 Be: paneke.

35 本偈 Sn 876 の解釈は先行研究においても様々である。荒牧・本庄・榎本 2015: 236 は「この世間において賢明であると自認するひとびとのうちの、あるひとびとは、以上のごとくであることだけで、霊魂の最高の清浄であるということを主張したり、他方またかれらのうちのあるひとびとは、いかなる所有をも余すことのない涅槃についての権威者であると宣言しつつ、寂静こそが［霊魂の最高の清浄］であることを主張する（荒牧訳）」と和訳、Norman 2006: 109 は“Some wise men here do say that the supreme purity of the yakkha is to this extent［only］, but some of them, who say that they are experts, preach that there is a time for［quenching］with no gasping remaining.”と英訳、村上・及川 1988: 733 は「これだけをもって、或る賢者たちはここに、魂（yakkha）の最高の清浄と説く。しかし彼等の或る者たちは［他の］宗論を述べ、生存の要素の残余がないこと（無余依）に詳しい、と言う」、さらに、中村 1984: 193 は「この世において或る者たちは、『霊の最上の清浄の境地はこれだけのものである』と語る。さらにかれらのうちの或る人々は断滅を説き、（精神も肉体も）残りなく消滅することのうちに（最上の清浄の境地がある）と、巧みに語っている。」と訳している。

36 それ故 Skt. 経典では upadhi が二種涅槃界の表現に採用されたと推測される（注 22 Skt. パラレル参照）。

37 Dhātuvibhaṅgasutta. 本経に現れる涅槃の語彙に関しては、富田 2018: 114–118 参照のこと。

38 Be; Se: vaṭṭiyā.

39 Be; Se: anupahārā.

40 Be; Se: evameva kho.

41 Be: vedayamāno.

42 Be: vedayāmīti.

43 Be: この後に paraṃ maraṇā.

44 Be 採用。Ee: sabbavedayitā abhinanditāni; Se: sabbavedayitāni abhinanditāni では意味が

とれない。

45　註釈 Ps p. 59: *saccan* ti paramatthasaccaṃ nibbānaṃ.「*真実*とは最上の真実、つまり涅槃」。

46　Be: tañhi.

47　Be: etañhi.

48　中村 2007: 131 は、Veda 文献において「pra-√jñā は、知覚対象を単に判断するだけではなく、既に得た言葉／知識／経験から、当面する事柄が、どの様な経緯を経て如何なる結果になるかを、予め想定（洞察）し、それを解決する能力に関わる「理解」をいう動詞と考えられる」と結論づける。同じ理解が本パーリ文献にもあてはまるといえる。

49　Sn Ch. 3 第 6 経「サビヤ経」Sabhiyasutta は散文と偈文から成る経であり、サビヤが世尊のことを「完全に目覚めた」（Sn 541: sambuddho）「自制を会得した」（Sn 542: damappatto）お方とも称える。

50　MN I pp. 160−175［第 26 経］「聖求経」Ariyapariyesanasutta. 本経は、世尊の覚り・成道の前後に関する仏伝であり、散文の中に偈文が出てくる（MN I p. 171 偈文）：

ahaṃ hi arahā loke, ahaṃ satthā anuttaro,
eko ’mhi sammāsambuddho, sītibhūto ’smi nibbuto.
何故なら私は世間の阿羅漢であるから、私は無上の師である。
［私は］正しく完全に覚った唯一の者である。
［私は］冷たく［清涼に］なっており nibbuta（涅槃を得た状態）である。

これは、世尊が成道後、初転法輪の地へと赴く途中、アージーヴィカのウパカ（Upakaṃ ājīvikaṃ）に対し、世尊が自身について何者であるかを告げる場面である。

51　MN I pp. 339−349［第 51 経］「カンダラカ経」Kandarakasutta. 世尊が大比丘集団と共にいるところにやってきた遊行者（paribbājako）カンダラカと像使いの息子ペッサ（pesso hatthārohaputto）と対話する経であり、世尊の説示に複数回出てくる表現である（MN I pp. 341, 344, 349）：

idha pana Pessa ekacco puggalo n’ev’attantapo hoti nāttaparitāpanānuyogam-anuyutto na parantapo na paraparitāpanānuyogam-anuyutto, so anattantapo aparantapo diṭṭhe va dhamme nicchāto nibbuto sītibhūto sukhapaṭisaṃvedī brahmabhūtena attanā viharati.

ペッサよ、ここにまた、ある人は自らを苦しめず、自らを苦しめる実践にふけらず、他を苦しめず、他を苦しめる実践にふけりません。彼は自らを苦しめず、他を苦しめず、現世において無欲で、nibbuta で、冷たく［清涼と］なっており、安楽を感受する者として、崇高な者となることによって、自ら住します。

52　Aggi-vacchagottasutta.

53　（1）世界は永遠である、（2）世界は永遠ではない、（3）世界は有限である、（4）世界は無限である、（5）魂と肉体は同じものである、（6）魂と肉体は同じものではない、（7）如来は死後生じる、（8）如来は死後生じることはない、（9）如来は死後生じるし、生じることはない、（10）如来は死後生じることはないし、生じることがないことはない、という 10 の見解にブッダは答えず、誤った見解であると説く。文献上

の事実に照らすと、生前に涅槃を得て「不死へと至った」（amata: Sn 204, 225, 228 等）と描写される者、つまり如来（tathāgata）に対して、「死後」（param maraṇā）と「死」という言葉をあてていることがそもそも誤まりであろう。

54　榎本 2012: 155 は、火が消える喩えが、『マハーバーラタ』Mahābhārata 12 Mokṣadharma の Bhṛgu の説 p. 180 に「霊魂（jīva）は死後も他の身体に赴き（yāti dehāntaram）存続し、その喩として、薪が燃え尽きても火は虚空（ākāśa）に付き従い、消滅する（pranaśyati）ことなく、見えない（na dṛsyate）ままで存在している（san）」と説かれることを指摘する。

55　DN II p. 92: Sāḷho Ānanda bhikkhu āsavānaṃ khayā anāsavaṃ ceto-vimuttiṃ paññā-vimuttiṃ diṭṭhe ’va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja vihāsi.「アーナンダよ、サーラ托鉢修行者は、漏を滅して、心解脱・慧解脱を現世において自ら理解し、目のあたりにし、獲得して住した」。

56　Dhaniyasutta. Sn 18 c 句: channā kuṭi, āhito gini, Sn 19: akkodhano vigatakhīlo［Se: -khilo］’ham asmi/ anutīre Mahiy’ ekarattivāso,/ vivaṭā kuṭi, nibbuto gini,/ atha ce patthayasī, pavassa deva.

57　富田 2012: 10 参照。Sn 中 parinibbuta は 4 経に見出せ、「ヴァンギーサ経」を除く 3 経とも生前の涅槃を明確に表す（富田 2021: 24–27［付録用例リスト］参照）。

58　例えば Sn 1087; 1095（富田 2021: 4, 22 参照）。

59　Sn 1094（注 7 参照）。

60　本稿 2.2. で紹介した Ch. 2「ヴァンギーサ経」や Ch. 3「二種の考察経」の他に、Ch. 1 第 10 経「アーラヴァカ経」Āḷavakasutta では、冒頭に散文で導入があり、韻文の問答が続く形で、在家の在り方と来世が説かれ、涅槃観の展開と在家を含む教団が確立されていたことが窺われる。Ch. 3 第 8 経「矢尻経」Sallasutta は 20 偈からなる説法であり、近親者を亡くして嘆き悲しむことの無益さを語り、自分の心に突き刺さっている矢尻を抜けば（Sn 592）、nibbuta になると経を締めくくる（Sn 593）。本経での nibbuta は心が鎮まることを表し、生前の涅槃の境地が示唆される（富田 2018: 67–68 参照）。冒頭と最後に散文がある Ch. 3 第 9 経「ヴァーセッタ経」Vāseṭṭhasutta では、二人のバラモン青年が世尊と真のバラモンについて問答をする。その中で、世尊が「この障害であり困難である輪廻という激流を超え進んで、渡り終え、向こう側へ達した。禅定に励みつつ、不動にして、ああだこうだと疑うことなく、取り込むことなく nibbuta であるその人を私は［真の］バラモンと言う」（Sn 638）と、生前に涅槃を得た者（nibbuta）は、既に輪廻を超え彼岸に至ったと説く（富田 2018: 68–70; 135–140 参照）。榎本 2007 も参照のこと。

61　Upasīvamāṇavapucchā. 本経では、ウパシーヴァの「その人が解放された者として冷たくなれるのであれば（sītisiyā vimutto）、そういう人の認識機能（viññāṇaṃ）は生じますか」との問い（Sn 1073）に対し、世尊は、火が風で消えてしまうことに喩えて、「寡黙の聖者は…解放され、消えてしまって、呼称に至らない（… vimutto/ atthaṃ paleti na upeti saṃkhaṃ）」と答える（Sn 1074）。註釈 Pj II p. 594 や複数の先行研究が、本偈で世尊は解脱者の命終を説いたと解釈するが（Norman 2006: 390、Collins 2010:

67−68, 81、村 上・及 川 1989: 106−114、中 村 1984: 226, 424）、Wynne 2007: 99, 100, 107 は、この命終後の問いに対し、世尊は生前の涅槃を語ったとの異なる理解を示し、この問答には「食い違い・誤解」（cross-purpose）が見られるとして、問答において、質問の意図とブッダの真意が異なる可能性があるという、新たな視点を提供する。

問答に食い違いや誤解があるというこの考え方は、前述の散文 DN II p. 92（本稿 3.2. 注 55 参照）に関してであれば、世尊が質問に直接的に答えていないという点で、成り立つといえるかもしれないが、Wynne 2007 が問題としている Sn 1073; 1074 の問答に関しては、命終後を尋ねた質問者の意図と完全に一致するものではないが、答えとしては成立していると、筆者はこれまでにない見解を提示したい。つまり、世尊の返答は、解脱者の生前とも命終とも理解可能であり、時点は判別できない。それ故、翻って、生前にも命終にもあてはまる境地であるとも解釈可能であるため、質問者の関心をも満たす答えであったと指摘され得る。本経については Tomita 2014 参照のこと。

（本稿は平成 31 年度科学研究費［基金］若手研究 19K12948 による研究成果の一部である。）